第 39 号

# from M

岸和田市郷土文化室（自然資料館（自然史担当）・郷土史担当・文化財担当）

平成 22 年 3 月 31 日

## 史料に見る岸和田祭の歴史（２）

山中　吾朗

岸和田祭の歴史を調べる上で最も悩まされるのが，関係史料の乏しさです。特に始まった頃の様子を伝える史料は，前々号で一部ご紹介しました「当町檀尻之濫觴五町御城入先後之一件書付写」がほぼ唯一の史料です。また，江戸時代の岸和田祭の様子を描いた絵画資料等も現在まで見つかっておりませんので，少ない文献資料を手がかりに当時の状況を推測するしかないのが現状です。こういう状況ですから，かなり推測を交えた議論とならざるを得ないことを予めご了解いただきたいと思います。

さて，今回はまず江戸時代の檀尻が通ったルートについて考察してみたいと思います。「当町檀尻之濫觴五町御城入先後之一件書付写」によれば，文化５（1808）年に藩から祭礼日を８月 13 日の１日だけにするので，町方と浜方は隔年で先に城入りせよ，と達せられたのですが，町方は祭礼が始まった由来を説明して町方が先に城入りするのが古くからの慣例であることを申し立てています。町方が先例としてあげた一つに天明６（1786）年の事例があります。

天明六年午八月祭礼、町・浜壇尻、俄芸十三日一日に差し出し候様仰せ付けられ、然るところ町・浜一同に相勤め候義、番数多く混雑に相成り申すべきやと恐れ入り、町中は十二日に御願い申し上げ奉り候処、さ候はば、町方の義は十二日御宮・両御奉行様相勤め、十三日早朝より一番に御城へ罷り出申すべき様、浜方の義は十三日御宮、続いて御城へ罷り出で申すべき様仰せ付けられ候

この年，藩から８月の祭りの檀尻と俄芸（寸劇）は 13 日１日だけにせよと達せられましたが，それでは町・浜から一度に檀尻をだすことになって混雑するので，町方は 12 日に御宮（岸城神社）と両奉行（町奉行・宗旨奉行兼任の奉行二人）のもとへ行き，13 日早朝にお城へ入ること，浜方は 13 日に宮入し続いてお城へ入るようにしました。

この史料からわかることは，まず，宮入りと城入りは別のこととして捉えられていたことです。岸城神社（この表現は明治以後の呼称ですが，ここではわかりやすいように岸城神社と呼びます）は城内の三の丸に鎮座していますが，檀尻がそこへ参ることは城入りとは認識されていなかったのです。町方は 12 日に宮入りし，翌 13 日に城へ入るということですから，「城入り」とは三の丸よりも内側，二の丸に入ることを指していたと考えられます。ちなみに「両御奉行様」は，現在の別寅かまぼこ城内寮の所にあった勘定所にその役所がありましたので，岸城神社のすぐ隣といってもよい位置です。これも三の丸に位置していたことになります。すなわち，北大手門跡からこなから坂を登り，本丸の周囲を一周する現在の宮入りルートに対し，江戸時代の宮入りは城入りせずに―つまり二の丸内を通らないで神前まで行くルートであったことがわかります。

以上のことから当時の宮入りルートとしてはおおよそ二つのルートが考えられます。一つは現在の祭りと同様に北大手門（今の市役所別館前にあった門）から入ってこなから坂を上り，今の市役所前の角でやりまわしをせずに真っ直ぐ進んで宮入りするルート，もう一つは，現在の宮出ルートの逆をたどり，東大手門（今の図書館前にあった門）から入って，宮入りするルートです。可能性としてはこの二つが考えられますが，現在の宮入りルートも長年積み重ねられてきた慣例に基づいて決められたものでしょうから，どちらかと言えば，前者のルートであった可能性が高いと思われます。

さて，明治時代に入りますと，宮入りルートがもう少しはっきりとわかるようになります。浜町庄屋であった高井家の史料に次のように記されています（明治５年８月「檀尻差出請印帳」）。

檀尻引出方規則

（中略）

一、当日、朝五つ半時より町村役人付き添い、順席を正し、北大手より引き入れ、神前へ相備え置き、昼後城内引き回し東大手を出、各町村へ引き入れ申すべき事

明治５年の記録ですが，朝五つ半時（おおよそ８時頃）から檀尻は順に北大手から入り，神前に供えて，昼すぎから城内を引き回してから東大手を出て各町村へ帰ることになっていました。北大手から入って神前に行き，東大手から出るということですから，ほぼ現在のルートに近いルートを，明治期には通っていたことがわかります。明治になってお城に入る，入らないという規制はかつてほどではなくなっていたものと思われます。

ところで，先に引用した天明６年の史料で，祭礼を 13 日１日だけにすると混雑する，との表現がありましたが，その頃，岸和田に檀尻は何台あったのでしょうか。やや年代が下がりますが，文政年間以後の祭礼経費の記録から各年に出された檀尻台数がわかりますので（「高井家文書」），それによって一部を抜粋して表にまとめてみますと次のようになります。

文政年間以降の岸和田の壇尻（「高井家文書」より）

| 年　代 | 町 | 浜 | 村 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 文政5（1822） | ― | 8 | 4 | 12 |
| 文政11 | ― | 6 | 4 | 10 |
| 天保3（1832） | 4 | 7 | 4 | 15 |
| 天保11 | 5 | 6 | 4 | 15 |
| 弘化2（1845） | 5 | 7 | 4 | 16 |

文政 11 年までの町方の檀尻数は不明ですが，天保３年以後は記録に残されています。これは，典拠史料が浜町の庄屋の記録で，天保２年までは，町方と浜・村方が祭礼を別々に行っていたため，祭礼の経費は浜・村で檀尻台数に応じて負担していたのですが，天保３年以後は，町・浜・村が一緒に打ち合わせて祭礼を実施するようになり，経費負担も一括して記され，浜町の記録に町方の檀尻台数も残されるようになったためです。従って記録にはありませんが，文政年間も町方の檀尻 4〜5 台ほどは出されていたと考えてよいでしょう。年によって引き出される檀尻数に若干の増減はありますが，江戸後期には岸和田の町・浜・村で最大 16 台の檀尻が存在していたことがわかります。これは現在の岸城神社へ宮入りする檀尻数（14 台）よりやや多い台数です。現在は檀尻のない魚屋町に１台と，浜７町の内，中町に２台あったためです。

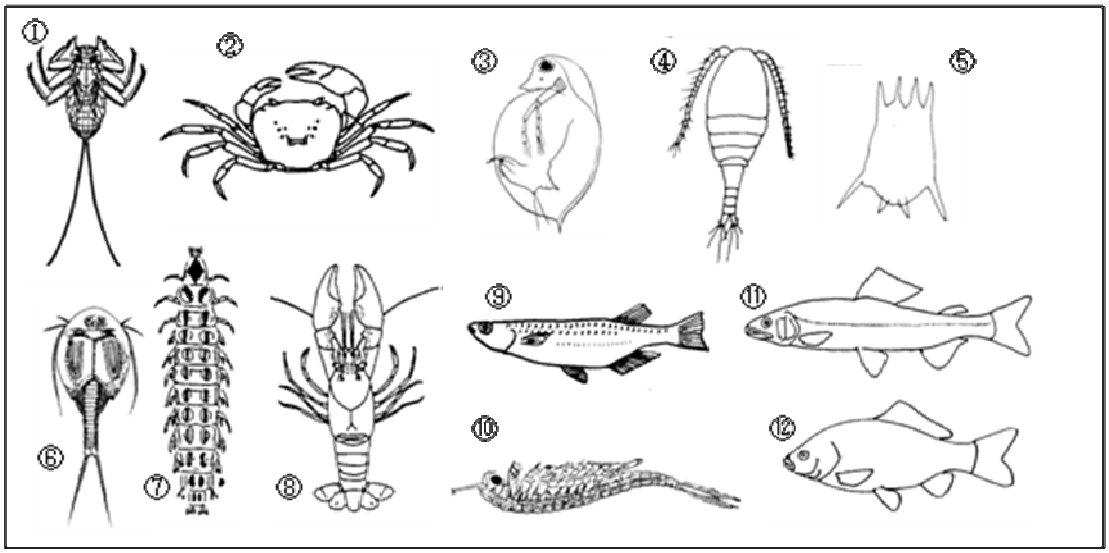
だんじり会館に展示されている現存最古の五軒屋町の檀尻は文政年間頃の作といわれていますが，大屋根を上下するからくりがあることを別にすれば，形式的には現在の檀尻と大きな違いはないように思われます。文政年間には宮入りコースは若干異なるものの，檀尻の形式・台数ともに現在とほぼ同様の祭りが行われていたと考えてよいのではないでしょうか。

（やまなかごろう：郷土文化室学芸員）

# 池の生きもの・川の生きもの

植野　敏郎

## ◎　動物




①カゲロウ　②サワガニ　③ミジンコ　④ケンミジンコ　⑤ツボワムシ　⑥カブトエビ
⑦ゲンジボタル　⑧アメリカザリガニ　⑨メダカ　⑩ホウネンエビ　⑪アユ　⑫フナ

上の図は淡水に棲む動物の一例です。皆さんは何という種類かわかるでしょうか。淡水に棲むと云うことで，これらの動物は池・川問わずどこにでも棲んでいると思いがちですが，産卵し子どもを育てるにはおおよそ決まった場所があります。淡水域を大きく分けると池（湖）と川に分けることができます。その特徴を考えてみましょう。

池は水が一定の場所に溜められていて，水の流れはほとんどありません。あっても非常にゆっくりです。そのような場所はたいてい深さが数m以上ある場合が多く，中層から底層にかけては酸素の量（溶存酸素量）が非常に少なくなります。光は深くなるほど少なくなります。また底には泥の溜まっていることがよくあります。

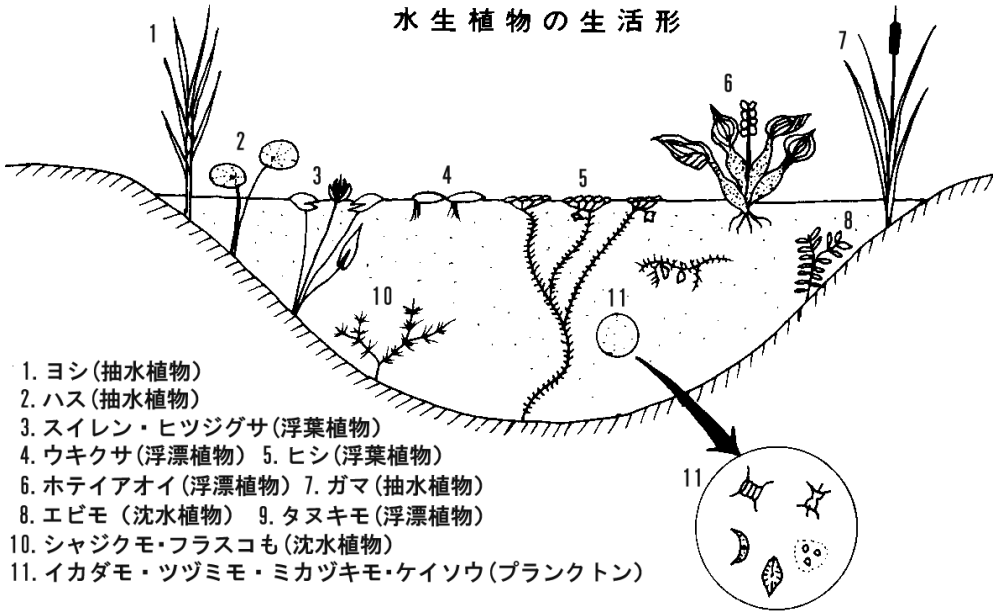
それに対して川は，山から海にかけて水が常に流れており，浅いところ深いところ色々あり，岩や段差のあるところで酸素が多くとけ込むので溶存酸素量はほぼ飽和状態に近くなっています。

これらの特徴を一口で云うと池は止水域，川は流水域ということになります。上の図で見るとミジンコ・ケンミジンコ・ツボワムシは池のみで，カゲロウ・ゲンジボタル・アユは川のみで，アメリカザリガニ・メダカ・フナは池・川の両方で，さらにカブトエビ・ホウネンエビは水田にのみに生存しています。池にのみ棲むミジンコ類等はいわゆるプランクトン（浮遊生物）と云われるもので，原則的には川には生存せず止水域にのみに生存しています。従って川においては水草の間やわんどになっており水の流れが非常に緩い所では生存していることがあります。淀川のように琵琶湖から常に放水されている川では湖のプランクトンが常に流れていますが，川で繁殖しているわけではありません。川でのみ棲む水生昆虫や魚類は溶存酸素量が最大の要因です。従って流水域の生き物を運搬したり，水槽のような止水域で飼う場合はエアレイションをきっちりと行うことが不可欠になります。池・川両方に棲むものは流れに対しても溶存酸素に対しても相当の適応力があります。水田にのみ棲むカブトエビ・ホウネンエビは特別の環境要因が必要で，よくわかっていませんが，卵の時代に乾燥に会うことが必要か，暑さや寒さに会うことが必要かまた別の要因が必要かそのあたりを調べてみるのも面白いと思います。

## ◎　植物

右の図は池（湖）に生育する植物を模式的に描いたものです。

水生の植物を生活形で区分すると，抽水植物・浮葉植物・浮漂植物・沈水植物・プランクトンの５区分になります。プランクトンや浮漂植物は根が無いか固着型になっていないので，流水域では生育できないですが，それ以外は根がしっかりしているので止水域でも流水域でも生育することができます。ホテイアオイや最近問題になっている外来種のボタンウキクサ（ウォーターレタス）は浮漂植物ですが，大型なので川の浅い所に留まり大発生に繋がります。カナダモやエビモは川にも見られる沈水植物ですが，どちらかといえば流れが少ない方が生育に良いようで，止水域で多く見受けられます。なお，植物は光が少なくなると生育できないので，止水域の深い所では植物が見られなくなります。




（うえのとしろう：自然資料館アドバイザー）

# information

**■岸和田城の展示案内■**
**企画展「泉州の古墳と埴輪」**

馬子塚古墳（摩湯町）・黄金塚古墳（和泉市）・地蔵堂丸山古墳（貝塚市）など，泉州各地の古墳から出土した埴輪約 100 点を一堂に展示します。

・会　期：3 月 17 日（水）～5 月 9 日（日）
・時　間：午前 10 時～午後 5 時（入場は午後 4 時まで）
・入場料：大人 300 円　中学生以下無料
・休場日：月曜日（祝日およびお城まつり期間中は開場します）

**■きしわだ自然資料館の展示案内■**
**第 14 回ネイチャーフォト写真展**

毎年恒例の自然の写真展です。普段は気がつかないような自然の姿が見られるかもしれません。

・会　期：4 月 11 日（日）午後～5 月 7 日（金）
・時　間：午前 10 時～午後 5 時（入場は午後 4 時まで）
・入場料：無料（ただし，常設展は有料）
・場　所：きしわだ自然資料館 1 F ホール
・休館日：4 月 19 日（月），26 日（月），30 日（金），5 月 6 日（木）

※お願い　[fromM]は，学校教職員に１部ずつお配りください。
担当の方はお忙しいところ申し訳ありませんが，よろしくお願い申し上げます。

【from M】では，みなさまからのご意見，ご感想，ご質問等をお待ちしています。博物館での学習，研究等に関する情報，地域の自然環境や歴史に関する面白いトピックスなどがありましたら，ぜひご投稿ください。お名前，連絡先，所属等をご記入の上，右記の宛先までお送りください。電子メールでも受け付けています。


連絡・問い合わせ先

〒596-0072 岸和田市堺町 6-5　きしわだ自然資料館
TEL:　(072) 423- 8100　FAX : (072) 423- 8101
Email: sizen@city.kishiwada.osaka.jp
自然資料館ホームページ URL:
http://www.city.kishiwada.osaka.jp/site/shizenshi/
Yahoo Japan の検索で「きしわだ」と入力し，検索すれば，簡単です）